

令和4年10月10日

南の風番外号 WC 女子日本代表予選敗退

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

たいへん残念な結果となりました。9月22日(木)よりオーストラリアのシドニースーパーアリーナで開催された、FIBA女子ワールドカップで、グループBの女子日本代表は、予選リーグ1勝4敗となり予選敗退となりました。優勝はアメリカでした。

予選第1戦 日本 89 — 56 マリ 予選第2戦 日本 64 — 69セルビア

予選第3戦 日本 56 — 70 カナダ 予選第4戦 日本 53 — 67 フランス

予選第5戦 日本 54 — 71 オーストラリア

以上が予選リーグの結果です。皆さんもテレビのLIVE中継、あるいは見逃し動画を通して観戦されたことと思います。

私が映像で観た感想です。マリ戦以外はオフェンスがうまく機能していなかった印象です。

①基本のアライメントは5アウトでしたが、崩しが上手く行かず流れの中でシンクロするという攻めがしっかりできず、ボールと人の動きが止まる場面が多く見られた。

②オフェンスリバウンドの確率が悪く、相手に流れを持っていかれる場面が多くかった。

③ガード陣が相手からのプレッシャーを受け、攻めの起点が思うように作れなかった。

④今回、恩塚ヘッドコーチが提唱して女子日本代表が取り組んでいる、『世界一のアジリティー』を表現することが十分にできなかった。オフェンスで攻めの原則を軸にして、場面に応じて最適解を選択し他の選手もシンクロしていくという、規律と即興、躍動感につなげていくというシステムが上手く機能しなかった。

①については、ワールドカップの予選全体を通して、④とも関連しますが恩塚ヘッドが目指すオフェンスシステムである、原則を軸に選手がその状況に即応した最適解の選択が上手くいかなかったと感じました。周りのプレーヤーも、どうシンクロしたらいいのか迷うことが多かったです。

②のオフェンスリバウンドについては、相手国が日本のサイズのなさを執拗に突いて来た印象を持ちました。各国とも飛び込みが非常に早かったです。日本のボックスアウトが徹底されなかったこともあります、相手の押し込みが上回った感じがしました。日本のリバウンドシステムがかなり研究され、リバウンドに行くタイミングを失いました。

③です。ガード陣への各国のプレッシャーの強さは、東京五輪の比ではありませんでした。宮崎選手はワールドカップを終えた時点で、「オーストラリア戦では、動こうとするのですが足がいうことを聞いてくれませんでした。足が棒のようになり思ったプレーが制限されてしまいました」とコメントしていました。安間、山本選手へのプレッシャーも相当きつかったです。コンタクトで飛ばされるシーンが何度も見られました。ここにも「日本のガードを潰す」という各国の意図が表っていました。

④です。恩塚ヘッドはおそらく「『世界一のアジリティー』は、まだまだ道半ば」と捉えていると思います。なぜなら、一年程度で定着できるほど容易なシステムではない気がするからです。

恩塚ヘッドが目指すバスケットは、壮大であり究極のものだと思うからです。私は、恩塚ヘッドが目指すバスケットを信じ、パリ五輪へ向けて向上変容する女子日本代表に大いに期待しています。